

日本統治時代台湾の動物慰霊碑

——畜魂碑・獣魂碑を中心に——

近年、動物と人間の関係を歴史的に問う研究が盛んになりつつある。『人と動物の日本史』全四巻（吉川弘文館、二〇〇九年）や石田戡他『日本の動物観 人と動物の関係史』（東京大学出版会、二〇一三年）など、このテーマを総体的に扱った論文集が出されたのははじめ、犬や馬、クジラなど個別の動物と人間との関係を歴史的に問う作品も多く出版されるようになってきている。

そうした研究が進むなかで、海外には見られない、日本独特の動物にまつわる民俗・習慣としてしばしば言及されるものに、「動物慰霊碑」や「動物塚」と呼ばれるものが存在する。動物慰霊碑が文字通り動物の慰霊を目的とするものであるのに対し、動物塚はもう少し幅広く、動物の墓のようなものも含んで用いられることが多いが、このような動物を供養したり慰霊したりする習慣は日本各地に存在しており、膨大な数の碑が各地に残存している。また現在でも、畜産施設や動物実験施設、さらに動物展示施設などには、動物慰霊碑が設置されて慰霊行事が行われている事例が多い。

真 辺 将 之

こうした動物慰霊碑や動物塚を検討した研究も近年いくつか出てきている^①。それらの先行研究は日本国内の動物慰霊碑や動物塚の建設の経緯、そこにまつわる伝説などを数多く紹介しているが、いずれも個別の碑の事例研究が中心となっており、そうした碑の背後にどのような動物観が存在するのか、またそれが近代社会のなかでどのように変化してきたのか、ということについてはまだ本格的な分析がなされているとはいえない。またそれらの研究は日本のみを検討の対象としているが、実はこうした動物慰霊碑は、日本の植民地となった台湾や朝鮮、さらには戦場となった中国でも設置されているのだが、これらの碑については検討対象となっていない。特に本稿で扱う台湾には、日本統治時代に、数多くの動物慰霊碑が設置され、それらのうち現在でも残存しているものが少なからず存在する。日本統治時代に建てられていた石碑の類の多くが戦後破壊されたが、そうしたなかでどうしてこれらの動物慰霊碑は残されたのか、というのが、筆者がこの問題に関心をもった出発点であった。

日本統治時代に設置されたものの多くが「畜魂碑」「獣魂碑」という名で屠畜施設に設置されたものであるが、筆者がこれらの碑について調べていくうちに、日本統治の終わった戦後になってから新たに建てられた「畜魂碑」「獣魂碑」もかなり多く存在することがわかった。従来の研究で日本独特のものとされてきた動物慰霊碑が、台湾でも広まっているということをどう考えればいいのか。単純にそれを日本の影響と捉えていいのか。またそれが仮に日本によってもたらされたものであったとして、戦後の台湾で存続したのはなぜなのか。これらを解き明かすためには、その背後にある台湾の動物観の変遷はもちろん、台湾の生活環境や動物との関係のあり方の変化、さらには日本観も含めて分析しなくてはならないと考える⁽²⁾。

また筆者は、台湾だけではなく、中国で日本人が設置した動物慰霊碑の扱われ方についても並行して調査しているが、中国でのそうした慰霊碑の扱われ方には台湾と対照的な要素が多くあると感じている。すなわち、その多くが破壊され、慰霊の風習は戦後残存せず、逆にそうした動物愛護の痕跡を日本による侵略の象徴として語り継いでいるという意味で、台湾とはかなり対照的な扱われ方がなされているのである。その背後には動物観だけではなく、歴史認識や日本認識、宗教観なども深くかかわっているものと考えられる。さらに筆者はまだ調査を行っていないものの、韓国にも、台湾同様獣魂碑の風習の残存がみられるようである。以上のような東アジアの動物慰霊碑について、相互比較を交えながら、総合的な考察を加えた

い、と筆者は考えている。

しかしながら、台湾をはじめとする東アジア諸国にこうした動物慰霊碑が存在することは、近年知られるようになりつつあるとはいえ、それを本格的に調査したものは皆無といってよく、どれだけの慰霊碑が残っているのか、あるいは戦後新しく建てられたものがどれだけあるのか、という基礎情報すら不足している状況である。そこで本稿では、まずその手始めとして、日本統治時代において台湾に設置された動物慰霊碑の残存状況についての基礎情報を整理・紹介したい。そのうえで、次稿以降において、戦後に設置された動物慰霊碑についての基礎情報を整備し、さらに日本統治時代以前の台湾における動物祭祀の状況やその背後にある動物認識、さらには日本統治時代から戦後にかけての台湾における動物認識の変化を追っていく、という手順で台湾における動物慰霊碑と動物観を追っていくという見通しを抱いている。そして将来的には、中国・韓国などの状況も検討し相互に比較しながら、東アジアの動物慰霊碑の総合的な検討に進んでいきたいと考えている⁽³⁾。

一 日本統治時代に設置され現存する碑

(一) 淡水畜魂碑

新北市淡水の淡水区農会の経営するスパーマーケットの敷地内に現存する自然石型の碑。一九四三年五月に淡水屠畜場内に設立さ

れたもので、同地にそのまま現存している。表面に「畜魂碑」と大書され、裏面には「昭和一八年五月十五日淡水郡警察課長神代文治書」とある。現在でも農会の人々によって月二回の祈祷が行われていることである。⁽⁴⁾



画像 1 淡水畜魂碑 (2012年8月撮影)

(二) 北投畜魂碑

台北市北投の大豊公園内に現存する畜魂碑。一九三九年末以来、北投屠場の関係者が相談して構内に建設を計画、翌一九四〇年二月

日本統治時代台湾の動物慰霊碑

一〇日に除幕式を挙行了⁽⁵⁾。碑の正面には「畜魂碑」と書かれ、その左下に「台北州衛生課長安達敬智書」とある。裏面には「建立者」として台湾人六名の名があり、末尾に「紀元二千六百年新春」と書かれている。

現地の方に聞いた話によれば、戦後、屠畜場が無くなってからは長らく草むらに埋もれた状態になっていたが、この地に大豊公園の整備計画が立ち上がった際にいったん撤去され、公園完成後元の場所に復帰したものであるという。現在は祭典も復興され、二〇一六



画像 2-1 北投畜魂碑 (2016年8月撮影)

年八月に筆者が訪問した際に、ちょうど中元の祭拝が行われ、碑の前で祭祀のための人形劇が行われていた（画像2-2）。

（三）木柵畜魂碑

台北市文山区の文山区公所前の文山公園に設置されている。もとこの付近（指南路一段一四巷三号）に屠畜場があり、そこに置かれていたものである。碑面には「昭和十二年四月 日建設」とあ



画像2-2 畜魂碑前で行われていた人形劇（2016年8月撮影）

る。戦後、屠畜場が無くなってからも、その地に住む謝姓の人物が毎年旧暦一二月四日に祭拝を行っていたというが、いつしか祭拝も行われなくなり、元の土台から切り離されて道端に放置されていたようである。現在では新しい土台の上に移転・整備され、歴史的遺物として公園内に展示されている。



画像3 木柵畜魂碑（2012年3月撮影）

（四）信義区畜魂碑

台北市信義区松山路の天寶聖道宮という有名な道教寺院の山門外西側に設置されている。もと台北大竜峒にあったものである。

台北大竜峒（日新街）には明治期以前から屠畜場が存在していたが、衛生上の問題が多いために一九〇九年四月に全面的に新築され、そ

の後需要の増加のために、一九二四年八月にさらに新しく立て直された。⁽⁹⁾一九二八年三月には家畜市場が開場、屠畜場はそこに附設されることとなった。⁽¹⁰⁾畜魂碑は、一九三〇年八月一五日に神社の杜司により破土式を挙行し建設開始、費用約二千元をかけ、翌年一〇月までの竣工を目指すとして報じられている。⁽¹¹⁾一九三一年六月九日に除幕式を大々的に挙行。当日は屠場の門前に大緑門を設け、天幕を張り、神式で行われた。屠場の代表者は周清桂、来賓は宮川州衛生課長、吉瀬陸軍獣医正、奥田警務部長、伊藤地方課長、坂本高等課長、西村警察課長などで、ほかにも台北・基隆・淡水の關係衛生官吏や警察などが多数参列し、営業者とあわせて数百名が参加した。⁽¹²⁾その後毎年旧暦七月に記念祭が僧侶による仏式で行われていた。⁽¹³⁾除幕式は神式、その後の供養は仏式で行われている点は興味深い。

戦後、大竜峒地域には新たに蘭州街という名前が附されたため、この畜魂碑は蘭州街屠畜場にあったと書かれていることもある。また蘭州街北段は一九七五年に大竜街と改められ、南段のみが蘭州街の名前を残している。このため大竜峒屠畜場と蘭州街屠畜場というものを別のものとして記述しているインターネット上の記事も見られるが、実際には同一の屠畜場である。この碑文は戦後一旦破壊されたが、一九七四年にこの地に移転されたものという。屠畜場はその二年前の一九七二年に閉鎖された。

碑には大きな自然石に「畜魂碑」の題字が彫られ、その左下に「台北州知事片山三郎書」と彫られている。題字の方が現在赤ペンキで

なぞられて強調されているのに対し、「台北州知事片山三郎書」の部分はペンキでなぞられておらず、摩耗して非常に読みにくくなっている。裏面には「碑文」と題して次のように彫られている。

天地氤氲 万物化成 品彙繁展 豕名剛鬣 犬呼盧令 馬賦一索 鷄
鳴三鳴 柔毛長髯 即羊之号 太牢大武 乃牛之称 統稱六畜 各具
一形 屠填宰割 以供犧牲 聞声不忍 仁政哀矜 嗟爾靈魂 天外飄
零 恨無宝筏 聊作雲輪 欣逢商衆 昭告虔誠 披肝致奠 以通幽
冥 惟祈來格 鑒此香馨 望速輪轉 及早超升 勒諸石碑 以表群情

昭和六年二月 台北屠商会聚全立
台北衛生課長宮川富士松撰



画像4 信義区畜魂碑 (2012年3月撮影)

挙士徐鼎新書

傍には香炉や仏像、祭祀道具等が置かれ、頻繁に祭拜が行われている様子が見てわかる。また「六道輪廻、畜亦人做、待行平等、慈悲福随。」とペンキで書かれた板も置かれていた。

(五) 宜蘭畜魂碑

宜蘭県頭城鎮の宜蘭県立蘭陽博物館の倉庫に保管されている。碑文表面に「畜魂碑」、その左下に「台中州知事平山泰書」とある。裏面には「碑文」と題して以下の文章が彫られている。

大千世界万物皆寄虚誕死生修短奚異方死方生各適各遂保身長族永享福利人養六畜不外此義夫畜資人殺身以食報德成仁犧牲之至非閔弱肉強食異類不忍穀觶厥情無二惟功百姓自古先惇恩及禽獸恒在其次無故宰割君子所忌不待規規懺悔致意奈茲屠戶職無可避但祈慈悲解脱早賜樹碑招魂來鑒純懿。

昭和六年十一月、宜蘭金造益營業者一同立

台北州警務部衛生課長

従六位勳六等宮川富士松撰

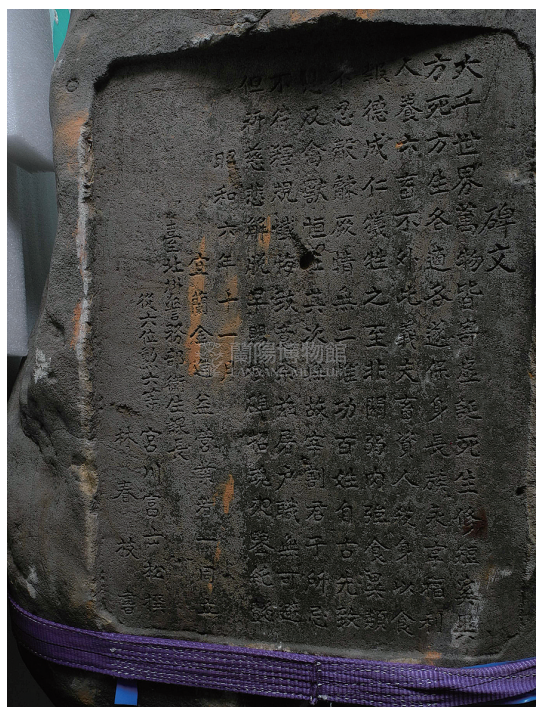
林春枝書

もともと宜蘭街の屠戸謝雲らにより建設が發起されたもので、同年一月二一日に地鎮祭が行われた。⁽¹⁴⁾ 同年一月二五日には除幕式が仏式で行われ、僧侶による焼香ののち、屠場総代の祭文と郡守と衛生課長の祝辞が読まれ、ついで読経が行われた。また終了後は宴会が開かれた。⁽¹⁵⁾ その後、建設五周年の年には獣肉營業者三〇余名が主

催し、畜魂碑前で仏式による盛大な記念祭を開催している。業者総代謝塗の挨拶について祭式が執行され、終了後公会堂で記念宴会が



画像5-1 宜蘭畜魂碑
(蘭陽博物館提供)



画像5-2 宜蘭畜魂碑裏面 (蘭陽博物館提供)

開催された⁽¹⁶⁾。碑は戦後一九八〇年代頃までは立派な土台に据えつけられて現存していたようだが⁽¹⁷⁾、その後撤去され、宜蘭県立文化中心に保管され、さらに蘭陽博物館の建設後は同博物館に移動された。普段は倉庫に横倒しに置かれており、展示はされていない。

(六) 豊原獸魂碑

一九三六年八月一日、台中県の豊原食肉改良組合（屠畜業者・獸肉販売業者によって結成されていた団体）によって設置されたもの。現在は台北市内陽明山麓永公路の西雲禪寺境内に移設されている。一九〇六年の嘉義大地震と一九三五年の中部大地震で多くの動物が死んだことがきっかけで建てられたとの来歴が西雲禪寺に伝えられているとのことだが、筆者は第一義的にはやはり屠殺された動物に対する慰霊が目的であったのではないかと考える。というのも、中部大地震以前の一九三三年九月二〇日に、豊原食肉改良組合主催で、屠殺された動物の慰霊を目的に獸魂祭が挙行されたとの新聞記事があるからである⁽¹⁸⁾。その後一九五九年の八七水災でこの碑文は埋没し、その後時期は不明だが、再発見されて西雲禪寺に移された。西雲禪寺では、これを歴史的遺物として保存するとともに、西雲禪寺が祀る観音菩薩が鬼王菩薩に指示して祭祀を命じたものと位置づけて祭祀を行なっているという。なお寺内は撮影禁止であるため写真掲載できない。

(七) 西寧獸魂碑

台中市清水区の西寧社区活動中心内に残存する碑。画像6の通り

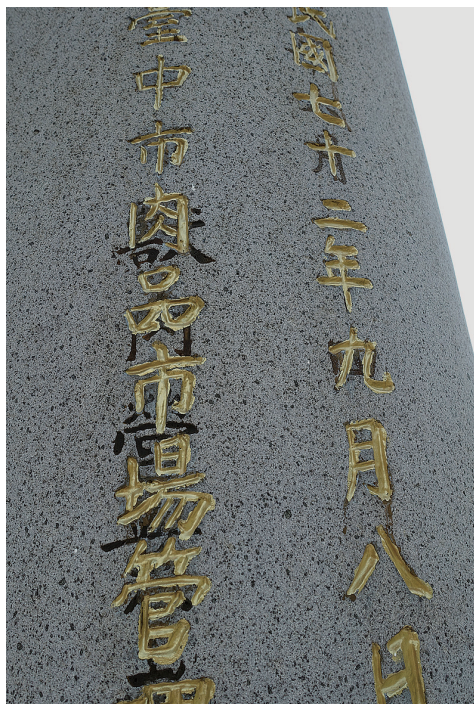
比較的小さい角柱型の碑で、表には「獸魂碑」、裏には「昭和十六年四月吉日建之 大甲郡獸肉販売営業組合」と彫られている。現地の人によれば、同地にはもと屠畜場が置かれており、戦後のある時期に屠畜場は廃止されたが、獸魂碑はそのまま残されていた。しかし道路拡張工事により一部土地を提供し、その代償として区のコミュニティセンター（活動中心）が設置されることとなったため、碑も活動中心の後方に移転した。



画像6 西寧獸魂碑¹⁹

(八) 台中市肉品市場獸魂碑

台中市肉品市場構内に現存する御影石による立派な円柱型碑。正面には「獸魂碑」と大きく書かれている。その左下にもともとは「台



画像7-2 上から彫りなおされた碑文



画像7-1 台中市肉品市場獸魂碑
(2016年8月撮影)

中州長竹下豊次書」と彫られていたが、元の字が埋められ、上から「台中市市長林柏榕題書」と新しく彫りなおされている。また、裏面にはもともと「昭和七年六月二十四日台中市獸肉營業者一同建」と書かれていたものが「中華民國七十二年九月八日台中市肉品市場管理委員會建立」と改められている（画像7-2参照）。経緯は不明だが、日台断交後の一九七四年二月二五日、国民党内政部が「台内民字第五七三九〇一号函」を出して日本統治時代の神社や記念碑等帝国主義・植民統治の象徴となる遺跡を撤去し、日本年号が記載されている場合にはそれを塗抹することを命じており（ただし寺廟や墓碑などで単純に年号が記されている場合は対象外とされた）、それと関連している可能性もある。ただしこの指令と上書きされた年号（一九八三年）との間に九年の隔たりがあることが気になる。あるいは、年号等を塗抹した時期と、新しい文字を彫った時期が異なる可能性もある。

もともとこの碑は、日本統治時代の台中市屠畜場の関係者が資金を集め設立、一九三二年六月二四日に除幕式が挙行された。除幕式当日は一切の屠畜を中止したという。⁽²⁰⁾当日の参列者は一〇〇名を超え、古沢市尹や州衛生課長も出席した。⁽²¹⁾除幕式は神道式で行われた。また大きく立派な碑であるため、工費は一五〇〇余円という多額を要した。⁽²²⁾現在でもこの碑は祭拜の対象となっており、毎年農曆七月中元普渡の儀式が行われている。また碑の前に香炉が置かれており、日常的に線香が焚かれているようである。



画像 8-1 霧峰獸魂碑 (2014年3月撮影)

(九) 霧峰獸魂碑

台中県霧峰里中正路一一〇五巷のバスケットボール場入口付近に



画像 8-2 霧峰獸魂碑とバスケットボール場 (2014年3月撮影)

置かれている。もともと大屯郡獸肉小売人組合により霧峰屠場内に設置されたもので、一九四一年一月八日、桐林州衛生課長臨席の

下、仏式により除幕式が挙行された。⁽²³⁾それほど大きくない円柱型の自然石で、碑の表面には「獣魂碑」と大きく彫られ、右に「紀元二千六百年記念」(ただし除幕式はその翌年に挙行されている)、左には「大屯郡獣肉商同業組合組合長楊文慶 副組長呉金銀二 役員組合員」と彫られている。戦後のある時期に屠場は廃止されてバスケットボール場になったが、碑のみは残された。碑には若者によると思われる相合傘などの落書きが多くなされているが、他方で立派な台座と手すりが設けられて保護もされている。位置的にはバスケットボール場入口の邪魔になっているが(画像8-2参照)、それをあえて残したところに、地域の人々の思いの強さを感じることができる。

(一〇) 永靖獣魂碑

彰化県永靖郷永安街に現存する。この地には日本統治時代から屠畜場があり、その構内につくられたものであるという。屠畜場付近ではいつも屠殺される豚の叫び声が聞こえ、また付近は荒涼とした竹林や蘆葦の草原が広がっており、特に寒風吹きすさぶ冬などは非常に凄惨な雰囲気醸し出していた。そこで現地獣医らの建議によりこの碑を建てることになったものであるという。戦後屠畜場は早くに無くなったが、獣魂碑だけはこの地に現在まで残り続けている。⁽²⁴⁾コンクリート製の尖塔型の碑で、文字は彫るのではなく、金属で作られた文字が埋め込まれる形になっている。珍しい形式である。



画像9 永靖獣魂碑 (2014年8月撮影)

(一一) 大林畜魂碑

大林駅の東約五〇〇メートル嘉義県消防局第二大隊大林分隊の手

前の草むらの中にある。薄い板型の碑で、表面中央に「畜魂碑」、右に「昭和六年辛未仲春」、左に「大林屠畜者一同敬立」とある。なお「昭和」の文字が塗抹されているが、前述した政府指令によるものと思われる。

設立の経緯は、台南州嘉義郡大林庄大林の獣肉商曾天夏ほか一二名の同業者が協議のうえ、罪滅ぼしのために建築を企画、屠殺豚一頭につき金一〇錢ずつを拠出し、翌年二月までに二〇〇円の予算で建設する予定と報じられている。⁽²⁵⁾ 実際の竣工はそれより一年遅れたようで、一九三一年四月一九日に、大林屠畜場にて除幕式と畜魂祭を挙行了たと報じられている。⁽²⁶⁾

なお、この碑には香炉のほかコンクリートとレンガで造られた金炉も付近に設置され、碑の周囲には囲いも設置されるなど、かなり充実したつくりとなっている。しかし実は戦前から一貫してこのようになつていたわけではないようである。二〇一〇年に隣にある消防隊の建物を新築した際に、消防隊員が草むらの中に碑がうずもれているのを発見、隊員の中には撤去すべきという意見と、保存すべきという意見があつたが、結局撤去することに決まり、整地作業を行おうとしたところ、整地のための機具が突然故障してしまった。そうして作業が中止されているうちに、大林鎮公所でこの碑の歴史遺物としての価値を認め、保存することを決定した。その後退職した消防隊員が退職金の一部を醸出し、またほかの人々の補助も得て、現在のように整えられたのであるという。⁽²⁷⁾

日本統治時代台湾の動物慰霊碑



画像10 大林畜魂碑（2014年8月撮影）

(一一一) 嘉義獸魂碑

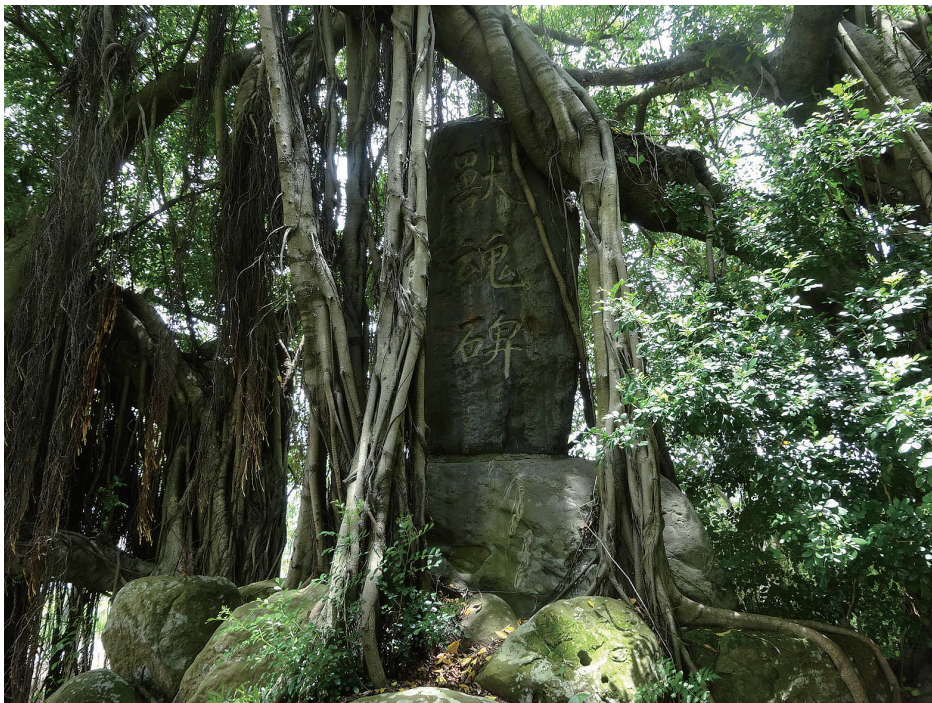
嘉義市香湖公園内に現存する碑。日本統治時代に屠畜場が設置さ

れ、地元住民はそれを「牛墟猪灶」と呼んでおり、転じてそれがこの辺りを指す地名としても使われ、二〇〇一年に屠畜場（嘉義市肉品市場）が郊外老藤里に移転したのちも、この呼び名は残っている⁽²⁸⁾という。

獸魂碑は自然石の積み重ねられた土台の上に造られた比較的大きく立派なもので、ガジュマルの木の下に囲まれて独特の雰囲気を出している。周囲は低いコンクリートの囲いで囲われている。碑の正面に「獸魂碑」と彫られ、背面に「昭和十三年三月三十一日建之 台南州知事從四位勲三等川村直岡書」と書かれている。囲いの背面には設立者の名前（内地人一人、台湾人一人、および末尾に「外組合員一同」とある）が彫られている。碑の前には香炉が置かれており、香炉には「祭魂会」「獸魂媽」「獸魂爺」「民国丙寅桂月」（一九八六年農曆八月を指す）の文字が見え、戦後にいたっても会が組織されて祭拝が続けられていたこと、およびその祭祀が道教風の民間信仰にもとづいておこなわれていたことがわかる。筆者はこの碑を二〇一四年八月と二〇一六年八月の二回訪問したが、二〇一四年八月訪問時は公園整備工事中であり、公園の周囲が鉄柵で囲われ工事関係者以外立ち入り禁止となっていた（筆者は現場にいた方の好意により中に入れていただいた）。しかしそのような状況でも線香が供えられ、小さな新しい杯に液体が注がれて置かれていた。また二〇一六年八月に訪問した際も沢山の線香が供えられ、また仏像と阿弥陀經の書かれた旗が碑の傍らに差し込まれていた。現在で

も熱心に祭拝に来ている人々がいるのだと考えられる。

なお、『台湾日日新報』紙上には、この碑の設置以前にすでに嘉



画像11 嘉義畜魂碑（2014年8月撮影）

義市屠畜場内に「畜魂碑」が設置されていたという記事がある。すなわち、嘉義市獣肉営業組合によって、開場以来の屠殺頭数が二万五千頭を超えたことによって設置され、毎年「畜魂碑祭」を開催していたのである。⁽²⁹⁾したがって、現在香湖公園内に設置されている獣魂碑は二代目ということになる。なぜ二代目に「畜」から「獣」へと名前を変化させたのかはわからない。なお、移転した老藤里の嘉義市肉品市場には、二〇一六年春に新たに「獣魂碑」が設置された。

(一三) 朴子獣魂碑

嘉義県朴子市老人会館の前に現存する。碑面裏中央に「昭和九年四月一日建立」、左に「朴子獣肉販売業者一同」、右に「東石郡守斎藤捨雄筆」と彫られている。

かつてこの場所には一九〇八年に設置された樸仔脚屠畜場が存在していた。碑の建設時、折しも台南州武徳殿の建設中であつたことから、従来から獣肉営業者に種々改善指導を加えていた東石郡在勤の上住獣医の發議で建設費用を節約することとし、その大部分を武徳殿建築費用として寄付したという。⁽³⁰⁾除幕式は一九三三年七月二九日舉行され、斎藤郡守、台南州⁽³¹⁾務部長代理、坂警部らが来賓として出席した。除幕式は僧侶を招いて仏式で行われ、斎藤郡守、高木助役、獣肉営業者代表黄文が祭文を朗読した。⁽³¹⁾なお一九三六年五月に舉行された獣魂祭では、祭典終了後、「営業者国語講習会」⁽³²⁾の発会式が行われたとの報道がある。⁽³²⁾戦後は、農曆七月一五日中午が、

ちょうど屠畜場の繁忙期と重なるために、二日ずらした一七日に祭拝を行っていたという。一九八六年に朴子市街南方に機械式屠畜設備の整った新しい肉品市場が完成し移転、碑のみがこの地に残された。戦前の写真を見ると立派な台座の上にのせられているが、現在は台座が撤去され、石が低い台座に固定される形になっている。⁽³³⁾台座が撤去された経緯は不明であるが、碑面にある「昭和」の文字が塗抹されていることを考えると、戦後日台斷交後、昭和の文字を抹消すると同時に台座が撤去されたのではないかと考えらえる。碑



画像12 朴子獣魂碑（2014年8月撮影）

も長らく草むらに倒れたままになっている時期があったという。⁽³⁴⁾

(一四) 恒春獸魂碑

屏東県恒春鎮恒西路の恒春山脚里活動中心後方に現存する。もと一九三五年に、獸肉業者によってかつてこの場所に存在していた屠畜場に設置されたものである。現在屠畜場はこの場所には存在しないが、恒春山脚社区の人々によって毎年農曆七月に祭拝が行われている。しかし戦前からずっと続けられてきたものではなく、一時祭拝が行われなくなっていたが、十数年前から復興されたものである。⁽³⁵⁾ 祭拝を行っているのは屠畜業とは無関係の人々であり、動



画像13 恒春獸魂碑 (2016年9月撮影)

物慰霊という本来の機能とは別に、社区の歴史を踏まえた地域行事の一つとして、新しい機能を担っているのだと考えられる。なお恒春では、日本統治時代に設置された多くの碑が戦後破壊され、碑面を削られるなどしたが、それが近年集められて、恒春石碑公園という公園として整備されている。しかしこの獸魂碑がそうした破壊を受けず、また公園にも収められなかったのは、この碑がほかの碑と異なる意味を地域の人々にとって持っていたからではないかと考えられる。

(一五) 墾丁牛羊集魂碑

本節の最後に紹介するこの碑は、屏東県恒春鎮墾丁里にある行政院農業委員会畜産試験場恒春分所に設置されている。同所は一九〇五年に設置された恒春庁種畜場に淵源を持つ歴史ある試験場であるが、現在も牧畜改良にかかわる試験を業務として存続している。

ここに存在する碑は、日本統治時代に淵源を有するとはいっても、石碑の形式は台湾の民間信仰の形式をとっている独特のものである。画像14がそれであるが、左から石符碑、牛羊集魂碑、籠仔埔土地公とされている(籠仔埔とはこの辺りの地名)。ただし牛羊集魂碑にはそのような文字が彫られているわけではなく、碑面を見るにもともと民間信仰にかかわる碑であったと考えられ、それがいつしかそう呼ばれるようになったのではないかと思われる。毎年申元普渡に祭拝を行っているが、所報によればその祭拝では「同仁們身体健康及諸事順心如意、闔家平安」を祈っているとされており、亡くなつ⁽³⁶⁾



画像14 墾丁石符碑・牛羊集魂碑・籠仔埔土地公（2016年9月撮影）

た動物の慰霊よりも現世利益を願う要素が強いようである。現世利益の傾向は台湾の民間信仰における中元普渡にもともと備わっている性格ではあるが、特に動物慰霊碑でありながらその慰霊・供養より現世利益が重視されていることには、三種類の石碑が置かれていることと、ここが屠畜場ではなく試験牧場であることなどが影響しているのかもしれない。

二 日本統治時代に淵源を有するが 戦後建て替えられて現存する碑

（一）鳳山獸魂碑

高雄市鳳山区に戦後再建されたものが現存する。最初の碑は一九二三年九月、同業者約二〇名の醸金による工費二〇〇万円を投じて屠畜場内に建設された。なお、新聞での報道では、屠畜場の場内に獸魂碑が設置されたのはここが最初であり、「高さ二間余、周圍に鉄柵を巡らし頗る立派なものである」と報じられている。⁽³⁷⁾ また同紙によれば、毎年旧暦八月十六日に盛大な祭式を行うことになっているとされている。

もともと屠畜場は鳳山市立志街に位置していたが、一九八二年、現在の經武路付近に移転することとなった。獸魂碑は移転されず、元の場所に置かれたままであったが、「美化環境」「尊敬獸魂」の目的の下に、獸魂碑を現在地に新しく建設することとなり、一九九九

年一〇月に獸魂碑重建委員会を設置、新台幣ドル三二万七千元を投じて二〇〇〇年正月より建設開始、二〇〇二年五月に竣工式を挙行



画像15 鳳山獸魂碑 (2014年8月撮影)

した。⁽³⁸⁾ 現在のものはコンクリート製尖塔型の大きな碑である。古い方の碑は新しい碑の建設と同時に撤去されたものと思われる。

(二) 馬公獸魂碑

澎湖県馬公市に存在する。もともと一九二九年一〇月に屠畜業者の黃文西等の建議によって、馬公草席尾にあった屠畜場に設立された。建立者の名前は現在の再建された碑にも記載されており、内地人四人、姓名から台湾人と思われる一四人の名が記されている。新聞ではこの翌年、三浦馬公街長を祭典委員長として、犠牲動物の精霊を弔うため、獸魂碑前で多数官民来賓臨場の下に供養祭を執行し、終了後松島記念館で簡単な晩餐会を開いたとの記事が見つかる。⁽³⁹⁾

戦後、一九六〇年一二月、風雨による碑の浸蝕破損が目立つようになったため、「屠宰公会」の会員全体で相談の上、資金を出し合つて再建することが決定された。その後一九七七年に現在の場所に澎湖県肉品市場が新築され、機械化された屠畜作業が行われることとなり、「屠宰公会」も「肉類公会」に名称を変更した。獸魂碑はもとの場所に置かれたままであったが、一九八三年、場所が離れていて祭典を行う上で不便だとの意見が出たために、元の外観を維持するという原則の下で、現在の場所に移転された。⁽⁴⁰⁾ 碑の左右前方に狛犬が置かれているがこれは戦前から残っている碑には見られない特徴である（次稿で紹介予定の戦後新築された碑には存在する）。

なお、鳳山と馬公の二つの碑は、現地に詳細な設立経緯の説明版が残されていたために、戦前からの連続性を持つことが判明したも



画像16 馬公獸魂碑（2016年8月撮影）

のである。戦後建築されたものであっても、設置から二〇年三〇年と経っているものについては、現地肉品市場で働いている人に聞いても、建設された由来などはすでに判然としなくなってしまうているものが多い。したがって、次稿として準備している、戦後設置された動物慰霊碑のなかにも、経緯が伝わっていないだけで、戦前に

すでに設置されていたものを建て替えたものが混在している可能性もある。

三 日本統治時代に設置されたが現存しない碑

本節では、現存しないが、新聞記事により設置されていたことが確認できる畜産関係の慰霊碑を列記する。

（一）基隆畜魂碑

基隆市滝川町の屠畜場に工費一二〇〇円をかけて設立された。高さ二二尺のコンクリート造りで非常に大きいものであった（コンクリート製の畜魂碑は台湾初という）。一九三三年一月二四日に宮川衛生課長、服部基隆警察署長等を招いて除幕式を挙行、除幕したのは中崎獣医の令嬢昭子氏であった。⁽⁴¹⁾その後毎年関係官員・営業者を招いて畜魂祭を開催しており、一九三五年二月八日に行われた第三回の様子を記せば、祭典代表者李侯伯が祭文を朗読したのち、一同が焼香して解散、夜は官民を招待した宴会を行っている。⁽⁴²⁾

（二）台北松山獸魂碑

警察官石田巡査部長の發議に台北州七星郡松山市場内の豚肉商が賛同して台北松山市場に設置された。工費二〇〇余円。一九三五年五月一八日に庄内住民多数を招いて落成式を挙行了。⁽⁴³⁾

（三）新店畜魂碑

新店屠畜場に設置された。一九三二年九月一五日に落成式が挙行

され、官民四〇名が公会堂にて酒宴を張った。⁽⁴⁴⁾

(四) 樹林畜魂碑

一九四〇年九月一七日、樹林屠場構内畜魂碑前で獣肉営業者が自発的に畜魂祭を行った旨の記事がある。⁽⁴⁵⁾ なお現在新北市樹林区の新北市肉品市場には、戦後建てられたと思われる畜魂碑が置かれているが(詳しくは次稿で扱う)、それと系譜的関係を有する可能性もある。

(五) 板橋畜魂碑

板橋市場獣肉商の呉炎が発起し、同業者を集めて出資、板橋屠場構内に設置された。一九三三年一〇月二日に建築に着手し、ほどなく完成したというので、比較的小さいものであったと考えられる。⁽⁴⁶⁾ 一〇月一八日に除幕式挙行。松下警察課長、山元警部、常田勸業主任、簡土城庄長などの多数官吏を招待して行われた。淀川畜産組合長による除幕ののち、僧侶の読経が行われ、淀川組合長が式辞を読み、海山郡守代理松下警察課長が国事、土城庄長簡鴻黎による祝辞、獣肉商代表者呉炎による慰霊の辞の朗読があり、閉会。その後板橋公会堂にて祝宴が開かれた。⁽⁴⁷⁾

(六) 新竹屠殺場獣魂碑

新竹の獣肉営業者の発起で「獣類の霊を慰める」ために醸金し新竹屠殺場内に設置。一九二五年一二月二五日落成。前幅七尺二寸、奥行六尺二寸、高さ九尺八寸という大きなものであった。⁽⁴⁸⁾ 毎年の例祭は仏教式で行われていたようである。⁽⁴⁹⁾

(七) 新竹大溪獸魂碑

獣肉業者により大溪屠場内に設立。一九三八年七月一六日、獣肉組合の総会後に、除幕式を挙行。その後、公会堂内に官民多数を招いて懇親会を開催したとある。曾我郡守、橋本課長、石川課長、馬淵警部、宮部街長などが出席したようである。⁽⁵⁰⁾

(八) 竹南獸魂碑

一九四〇年五月二五日、竹南小学校向側に建築され、除幕式と慰霊祭を挙行した。慰霊祭は「聖戦に於ける将兵の労苦は常に感激する処であるが、将兵と共に活躍し若くは奉公した畜類の事も忘れてはならない〔中略〕これらの畜類を慰めるべく」、竹南郡守が斎主となり、郡下の家畜飼養者全員と官民多数が出席し仏式により挙行された。⁽⁵¹⁾ もともと獣魂碑は家畜慰霊のために計画されたものであったと思われるが、それが時局下で軍用動物慰霊を中心とする祭典へと性格が変化したものであろうと思われる。

(九) 埔里獸魂碑

埔里の獣肉業者一同により建立。一九三二年八月以来、獣類一頭を屠殺するごとに一〇銭を徴収し、翌年五〇〇円余となったので建碑した。土台五尺四方、高さ六尺、幅一尺九寸、厚さ一尺三寸の自然石のものであった。一九三三年九月七日に安達衛生課長、沢井能高郡守、八角警察課長、外間庶務課長、林街長など列席のもと落成式を挙行、読経、焼香などを行い、一同記念撮影、その後青年会館で宴会を行った。⁽⁵²⁾

(一〇) 彰化獸(畜?) 魂碑

彰化街屠畜場関係の獣肉販売業者の発起により一九三二年四月八日に除幕式を挙行した。なお日本語版報道では「獣魂碑」となっているが、同夕漢文版では「畜魂碑」となっており、どちらが正しいのか不明である。⁽⁵³⁾

(一一) 斗六獸魂碑

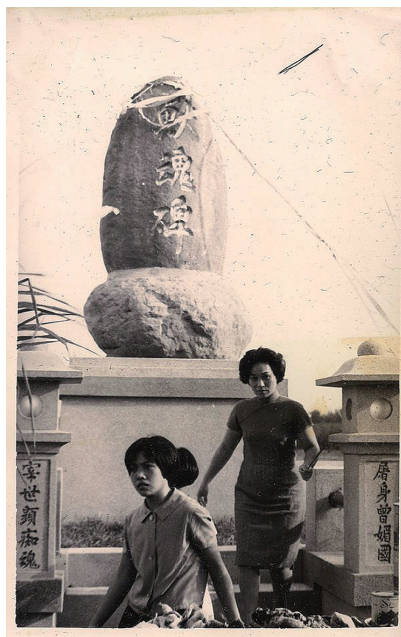
設立年不明。一九三五年三月一九日に斗六郡獣肉営業組合が屠場にて畜魂祭を挙行したとの記事がある。⁽⁵⁴⁾ この時には獣魂碑の存在には言及がないが、一九三八年三月二八日に行われた獣魂祭は、斗六屠場内の獣魂碑前で行われたと書かれている。

(一二) 北港獣魂碑

北港郡獣肉営業組合が、一九三八年四月二四日、北港公会堂で定期総会と獣魂祭を執行するとの記事がある。ただしこの記事では獣魂碑には言及がない。⁽⁵⁵⁾ 北港にはもともと「牛墟」と呼ばれる牛市場が北港鎮の南川岸にあり、日本統治時代になってからその付近(現在の民生路付近)に屠殺場がつくられ、そこに最初の獣魂碑が設置されたとのことである。その後、屠殺場は鎮北方(現在の華勝路付近)に移転、獣魂碑も移転されたようである。画像17はその獣魂碑の画像だが、写っている人の服装や碑文の囲いに「屠身曾媚国」「宰世頭痴魂」という文字が見えることから(戦前一九四〇年頃撮影された別の写真にはこの文字や灯籠はない)、戦後ほどない頃のものと思われる。



画像18 戦後建て替えられた万靈塔⁽⁵⁸⁾



画像17 日本統治時代に建てられた獣魂碑⁽⁵⁷⁾

その後一九四九年に、獸魂碑は「万霊塔」と題する碑に置き換えられ、「万霊公」と称する道教風の神の碑として祀られるようになり(画像18)、さらにその後万霊宮という名の道教の廟に生まれ変わったという。万霊宮は近年まで存在していたが、現在は撤去された。なお現在は、屠畜業にかかわる人々は、付近の靈感宮という道教の廟を崇拜している。⁽⁵⁶⁾

(一二) 麻豆獸魂碑

台南の麻豆屠畜場で一九二七年七月二五日に除幕された。屠畜場に働く職員が各自醸金して建てたもので、新聞報道では、「自知殺生過多。恐招罪過。故積財欲豎碑。以慰獸靈」とその動機が報じられている。⁽⁵⁹⁾

(一四) 旗山獸魂碑

高雄の旗山屯畜場に設置されていた。設立年代は不明だが、一九三八年四月一六日組合員一一一名に來賓安倍衛生課長、紀野獣医、藤原警察署長および警察課員を招いて獸魂祭を挙行したとの記事がある。なお一年間の屠殺頭数は、豚二万三〇六頭、牛二三〇頭、山羊二万一一三四頭とあり、豚と並んで山羊が多いことが目につく。⁽⁶⁰⁾

(一五) 屏東台湾畜産会社獸魂碑

日中戦争で死歿した軍馬を台湾畜産会社工場で処理したことをきっかけに、同州下で死んだ牛豚の魂をも弔うべく、会社構内に獸魂碑を設立したもの。一九三九年一月三一日に除幕式と慰霊祭を挙行した。⁽⁶¹⁾

四 日本統治時代のものか不明な碑

(一) 桃園畜魂碑

現在桃園市肉品市場内に、「畜魂碑」が存在する。台座や柵などは新しいものだが、碑そのものは古いものと考えられ、後述する日本統治時代に作られたものの可能性が高いように思えるが、確証はない。市場関係者にも尋ねたが、不明だがかなり昔からある、との回答であった。後考に俟ちたい。

日本統治時代に作られたものは、一九二四年四月二八日に除幕式が挙行された。新聞記事では、「台湾では初めての畜魂碑」と報じられているが、前述の通り実際にはこの前年に鳳山に「獸魂碑」が設立されており、「畜魂碑」という名前としては初めてかもしれないが、同種の碑としては台湾初とは言えない。この碑文は桃園街の獸肉業者一四名が主唱して、労役と食肉の犠牲になった畜類の霊を弔う意味の下に建設されたという。三月二〇日から工事を開始し、四月二三日に竣工、建設費は各自が労力を提供したためにわずか三五円一〇銭を要したのみであったという。この建築期間と建築費用を考えるに、小さいものであったと考えられ、現在桃園市肉品市場に置かれているものも比較的小さいことを考えると同一のものである可能性はおおいにあるように思われる。除幕式は四月二八日、桃園屠畜場で行われ、杉野郡守、内田課長、織本課長、徳永新竹警察

課長、井上中壢警察課長、簡朗山桃園街長、および台湾動物保護会の河田光之祐が来賓として出席した。⁽⁶²⁾

なお、台湾動物保護会は、台中市在住の実業家で出雲大社教の信徒でもあった河田により、木村匡を顧問として一九二三年七月二一日に設立されたもので、台湾最初の動物愛護団体である。同年八月には会員一〇〇〇名を突破、台北に支部も設けられた。⁽⁶⁴⁾ 同会は動物虐待防止の講演会を開催したほか、牛馬のための飲水所を設置した⁽⁶⁵⁾りもしている。おそらく日本の動物虐待防止会の影響を受けての活



画像19 桃園畜魂碑（2016年8月撮影）



画像20 清境農場小瑞士花園獸魂碑（2016年8月撮影）

動であろうと思われる。同年一月には大社教千家尊有管長を総裁に迎え、また後には動物保護模範者の表彰式を行うなど、台湾における動物愛護運動に大きな影響を与えた。⁽⁶⁶⁾

(二) 清境農場小瑞士花園獸魂碑

原住民による抗日武装蜂起として有名な霧社事件の現場にほど近い南投県仁愛鄉定遠新村にあるレジャー施設清境農場小瑞士花園に現存する獸魂碑。同園の入り口から左手に伸びる杉並木道をしばらく行くと職員行政区の建物があり、その裏側の小高い丘の上にある。夏は草が生い茂り、さらに水道タンクなどが並んでいて障害物が多く、碑までたどり着くには大変な労苦を要する場所であり、既に忘

れ去られた碑であると考えられる。コンクリート製でかなり古いものと思われるが、碑には「獣魂碑」としか彫られておらず、日本統治時代のものか、あるいは戦後ほどない時期のものかもよくわからない。小瑞士花園の職員に尋ねたところ、詳しいことはわからないが、園内の現在キャンプ場となっている場所（碑の付近）が昔牧場として使用されていたと聞いているので、その牧場の動物のために作られたものではないかとのことだった。もちろん、推測に基づくもので確証はないため詳細は後考に俟ちたい。

（三）員林獣魂碑

員林旧猪竈屠宰場内に設置されていた獣魂碑が近年まで員水路付近に残存しており、地元の人々の話では、毎年屠宰場の人々が中元普渡の祭行を行っていたという。猪竈屠宰場は十数年前に廃止され、彰化県警察局によるレッカー移動車の保管場となったが、その後もこの碑と金炉だけは残され祭行されていた。碑の設置年代は不明で、画像21のように、コンクリート製の尖塔型のもので、日本統治時代の可能性もあるが、戦後早い時期のものである可能性もある。二〇一四年に道路拡張工事によって撤去された。なお、一九三九年一月六日、員林獣肉販売営業組合が総会後に員林屠宰場で獣魂祭を執行了との新聞記事が掲載されており、この獣魂碑はその延長線上にあるものと考えられる。⁽⁶⁷⁾



画像21 員林獣魂碑（江武昌氏撮影⁽⁶⁸⁾）

五 畜産関係慰霊碑以外の動物慰霊施設

以上に取り上げてきた慰霊碑はすべて畜産関係の慰霊碑であるが、慰霊碑以外の形式のもの、および畜産動物以外の動物慰霊碑をここでは取り上げる。

（一）台湾畜産会社牛魂祠堂（現存せず）

台北市幸町にある台湾畜産会社が、一九二九年、同社乳牛中過去十数年に於いて老死したものが六〇〇頭に達したため、「牛魂祠堂」を建設した。これ以前から同社は「牛魂祭」を行っていたが、一九二九年一月二五日、第四回の牛魂祭を行うと同時に、祠堂の入仏

式を挙行した。⁽⁶⁹⁾

(二) 台湾護国神社軍用動物慰霊塔（設置されたか不明）

斎藤総務長官を委員長に、鈴木台湾軍獣医部長、西軍兵務部員、石川郡副官、および殖産局長、文教局長、各州知事、府農務課長、営繕課長、学務課長、社会課長、建設技師を慰霊塔建設医院に委嘱し、建設準備に着手することとなったとの記事がある。費用六万円は各州庁畜産会および全島国民学校児童有志その他の自発的寄進によって醸出される計画で、主管局たる文教局で準備中とされているが、建設が実現したかは不明である。⁽⁷⁰⁾

(三) 高雄馬魂碑（現存せず）

陸軍臨時検疫所高雄支所にて「物言はぬ戦士として皇軍と共に不滅の武勲をたて陣歿した軍馬の忠魂に対して深く敬弔の意を表するため」に建設。一九四三年一月四日に除幕式を兼ねた軍馬慰霊祭を挙行。部隊長・関係将校のほか、市長代理河野助役、村瀬庶務課長、江波畜産興業高雄工場長ら軍官民が参列し、神式での慰霊祭が行われた。⁽⁷¹⁾

(四) 阿里山樹霊塔（現存）

動物慰霊碑ではないが、日本統治時代に設置された植物の慰霊碑であり、関連するものとして特にここに紹介しておきたい。一九三六年に阿里山神社境内に設置されたもの。阿里山ではそれ以前から毎年三月二十五日を樹霊祭の日と定めて、阿里山神社にて毎年祭典を行っていた。また同日あわせて一九〇九年の創業以来の殉職者の



画像22 阿里山樹霊塔（2016年8月撮影）

慰霊祭もあわせて挙行していた。⁽⁷²⁾ 阿里山神社は戦後撤去されたが、樹霊塔は残された。

なお、碑文の台座の輪は木の年輪を、また中下部左右二本の円柱に切れ目が入っているのは、伐採の際の鋸を入れた様子を象徴しているものであるという。樹霊を祀るものでありながら、鋸の痕を表現するというのはおかしな気もするが、林業で生きるこの地の人々の象徴を入れたという気持が強かったのであろう。

おわりに

以上本稿では、日本統治時代に設置された動物慰霊碑の情報を整

理した。今回は基礎的な情報の整備が目的であり、本格的な検討は別稿を期したいが、以上の整理から気が付くことをいくつか指摘しておくならば、以下のことが言えるであろう。

まず台湾における動物慰霊碑は多くが畜産関係、特に屠畜場に設置されたものであるということ、さらにその設置は明治期には確認できず、大正後期に設置が始まり、ほとんどのものは昭和期に設置されていることである。また碑の多くは、屠畜業者や販売業者によって自発的に建てられているが、除幕式には多く公職者を招待する例が多い。当時屠畜場は警察の管轄であり、また衛生関係部局の関与も深かったため、来賓官吏もその関係者が多い。なかには松山市場の獣魂碑のように、警察が設立を発起したものもある。また組合の定期総会後に祭典を行っている例も多く、除幕式や祭典の終了後懇親会や宴会を開いている例も多い。これらから考えると、碑の設置や祭祀は、単に動物を慰霊するだけではなく、それをきっかけに屠場内や、官民の懇親を深める機能を併せもっていたものと考えられる。

また名称については、「畜魂碑」と「獣魂碑」とが相半ばしているが、北に「畜魂碑」、南に「獣魂碑」が多いという特色がある。「畜魂碑」が最初に設置されたのは桃園であり、「獣魂碑」が最初に設置されたのは鳳山であるが、本文で記したように、いずれも新聞記事で台湾最初の碑と報じられていることから考えて、それぞれが別個に北部・南部に影響していったことが、こうした名称の傾向に影響

しているのではないかと考えられる。なお戦後設置される碑は「畜魂碑」よりも「獣魂碑」が圧倒的に多くなっていくが、そのことは次稿において詳しく見ることにしたい。

さらに、もともと筆者は日本時代の碑の「残存」に着目して研究を始めたのであるが、新聞等で設置された記事を調べると、戦後所在不明になっている碑も多い。また戦後一旦破壊されたり放置されたりしていたものが、ある時点で再発見され、祭拜が復活したものも存在する。以上を踏まえるならば、必ずしも「残存」の側面ばかりを強調できないということもわかる。また最近になって祭祀が復活する例がみられるのはなぜなのかについても考える必要があるだろう。

また、本稿では紙幅の都合詳しく触れられなかったが、新聞記事を見ると、台湾各地で動物慰霊祭がかなり広範に行われてきたことがわかる。各地の屠畜場で獣畜慰霊祭が行われていたほか、血清製造所による牛畜招魂祭・犠牲動物慰霊祭、台北円山動物園の慰霊祭、さらには官民双方による軍用動物慰霊祭の記事が見いだせる。しかしこうした慰霊祭が行われる一方で、台湾には道教寺院等での供儀の文化も存在している。そうした動物に対する様々な考え方が、どのように接触して人々の動物観を形作ったのかを、社会環境の変化を踏まえながら問う必要があるだろう。関連して、以上紹介した碑のうち、寺廟内に置かれているものが極めて少ないことにも着目すべきであろう。これは動物慰霊というものが、台湾の既存の宗教体

系のなかに入りにくい周縁的要素であることを示しているのではない。逆に言えば、そうした周縁的なものであり、台湾社会の何かで代替しえないものであるが故に、日本由来のものでありながら、社会に定着しえたとも考えられる。また宗教の関連でいえば、戦前の祭祀は神道式と仏教式とに二分されているが、戦後にまで祭拜が続いている碑については、多くが農曆七月中元普渡の儀式を中核的祭典とし、道教を基軸とする民間信仰の形式に則っている。これは次稿で扱う戦後新たに設置された碑においても同様である。つまり、もともと日本統治時代に淵源を有するといっても、現在の祀られ方は台湾の民間信仰の形にのっとって修正されていることが指摘できる。つまり「残存」の一言で片づけられない、日本統治時代の慣習の戦後への接続のあり方を考える必要があるということである。この点は、次稿で予定している、戦後あらたに設置された動物慰霊碑の情報整備によって、さらに考察の材料を得られることであろう。

注

- (1) 松崎憲三『現代供養論考 ヒト・モノ・動植物の慰霊』（慶友社、二〇〇四年）、依田賢太郎『どうぶつのお墓をなぜつくるかーペット埋葬の源流・動物塚』（社会評論社、二〇〇七年）、高木大祐『動植物供養と現世利益の信仰論』（慶友社、二〇一四年）、長野浩典『生類供養と日本人』（弦書房、二〇一五年）など。

- (2) 本稿にかかわる先行研究としては、依田賢太郎「東アジアにおける動物慰霊碑をめぐる文化」がほとんど唯一の先行研究といえるものだが、取り上げられている事例が少ない上に、「台湾には台湾人が自ら建立したと考

えられる動物慰霊碑のようなものはみられない」という全くの事実誤認があることなどから明らかなように、十分な調査のうえで検討がなされているとはいえない。

- (3) 以下註に『台日』とあるのは『台湾日日新報』の略であり、特に注記のない場合は日本語版である（『台湾新民報』も同様）。また本文中の掲載写真は特に註記のない場合、筆者が撮影したものである。

- (4) 片倉佳史『台湾に生きている「日本」』（祥伝社、二〇〇九年）九六―九七頁。

- (5) 『台日』一九四〇年二月一日夕刊。

- (6) 許哲豪「忠魂碑、畜魂碑」（『木新社区報—第九期第五版郷土教育』、木新社区発展協会、二〇〇三年一月）。また、この地域の人々の生活のルポルタージュである Howard Rusk Long *The People of Mushan, Life in a Taiwanese Village*, University Of Missouri Press, 1960 には台座に載った状態の写真が掲載されており、またこの碑について、仏教徒の理想と現実との妥協の産物であり、殺されたブタの魂をなだめるために建てられたと書かれている。

- (7) 『台日』一九〇一年二月一日漢文版。

- (8) 『台日』一九〇九年四月八日。

- (9) 『台日』一九二四年八月三〇日。

- (10) 劉劍寒『台北市街路史』（台北市文獻委員会、一九八五年）。

- (11) 『台日』一九三〇年八月一日。

- (12) 『台日』一九三二年六月一日夕刊漢文版。

- (13) 『台日』一九三三年五月二四日漢文版。

- (14) 『台日』一九三一年九月二四日夕刊漢文版。

- (15) 『台日』一九三二年二月二四日漢文版。

- (16) 『台日』一九三六年九月一日。

- (17) 宜蘭県史館のデータベース「宜蘭人文知識數位資料庫」で、一九八〇年代に屠畜場が廃止された後も残っていた碑と土台の画像を見ることができ

る。

- (18) 『台日』一九三三年九月二四日漢文版。
- (19) ウェブサイト「台中市文化資產」より引用。http://www.tchac.taichung.gov.tw/monuments/Details.aspx?Parser=99.5.34...243 (二〇一六年九月一六日閲覧)。
- (20) 『台日』一九三二年六月三日。
- (21) 『台日』一九三二年六月二五日。
- (22) 『台日』一九三二年六月二六日漢文版。
- (23) 『台日』一九四一年一月九日。
- (24) 彰化県政府ウェブサイトに記事「祭拜屠宰場亡魂 彰化永靖設獸魂碑」
http://www.cna.com.tw/Proj/County/001/cht_news/200908010091.aspx?
page=280 (二〇一六年九月一六日閲覧)。
- (25) 『台日』一九二九年九月二五日夕刊漢文版。
- (26) 『台日』一九三一年四月一九日漢文版。
- (27) 『聯合報』二〇一三年三月三十一日報道。
- (28) 國立中正大學成人及繼續教育學系「嘉義市西區推展宣傳工作計畫正式報告書」(二〇〇三年、國立中正大學)。
- (29) 『台日』一九三二年九月一九日漢文版。
- (30) 『台日』一九三三年七月四日。
- (31) 『台日』一九三三年八月一日漢文版。
- (32) 『台日』一九三六年五月二日。
- (33) ブログ「朴子郡@生活圈」記事「生命教育的場域——豬灶獸魂碑」
http://puzipay.blogspot.jp/2015/04/blog-post_57.html (二〇一六年九月一六日閲覧)。
- (34) 社団法人嘉義県郷村永続發展協會ウェブサイト記事「豬灶走入歷史」
http://ceda2010.blogspot.jp/2010/12/blog-post_1607.html (二〇一六年九月一六日閲覧)。
- (35) ウェブサイト「恒春數位機械中心」
http://ptdoc09aeweb.com.tw/article-detail.aspx?item=12&doc_id=155156 記述による (二〇一六年九月一六日閲覧)。

- (36) 『畜試所訊』三〇二一(行政院農業委員會畜產試驗所、二〇一五年九月)。
- (37) 『台日』一九二四年一〇月一五日。
- (38) 現地説明板による。
- (39) 『台日』一九三〇年一〇月一日。
- (40) 現地説明板による。なおこの獸魂碑の現在の祭祀のあり方について研究したものとして、呉金柱「台湾肉品市場為牲畜超渡儀式之研究——以澎湖縣為例」(弘光大學宗教學系碩士論文、二〇一三年)がある。ただし日本統治時代に関する言及はほとんどない。
- (41) 『台日』一九三三年一〇月八日。『台灣新民報』一九三三年十一月二五日。
- (42) 『台日』一九三五年二月一〇日。
- (43) 『台日』一九三五年五月一六日。
- (44) 『台日』一九三二年九月一八日夕刊漢文版。
- (45) 『台日』一九四九年九月一九日。
- (46) 『台日』一九三三年一〇月一八日夕刊漢文版。
- (47) 『台日』一九三三年一〇月二〇日漢文版。
- (48) 『台日』一九二五年二月二五日。
- (49) 『台日』一九三二年九月四日夕刊漢文版。
- (50) 『台日』一九三八年七月一八日。
- (51) 『台日』一九四〇年五月二八日。
- (52) 『台灣新民報』一九三三年九月八日。『台灣新民報』一九三三年九月一〇日漢文版。
- (53) 『台日』一九三二年四月八日および同日夕刊漢文版。
- (54) 『台日』一九三五年三月二日。
- (55) 『台日』一九三八年四月二日。
- (56) 北港文化工作室Facebook ページ (https://www.facebook.com/PeikangVC/) 二〇一三年五月二三日および同年五月二二日の記事による (二〇一

六年九月一六日閲覧)。靈感宮については次稿で紹介予定。

- (57) 北港文化工作室 Facebook ページより引用。 <https://www.facebook.com/PeikangVC/photos/a.251286128273539.57578.248483245220494/475826202486196/> (二〇一六年九月一九日閲覧)。

- (58) 北港文化工作室 Facebook ページ二〇一三年五月二一日投稿記事より引用。

- (59) 『台日』同年七月二六日夕刊漢文版。

- (60) 『台日』一九三八年四月一八日。

- (61) 『台日』一九三九年一月二八日。

- (62) 『台日』一九二四年四月三〇日。

- (63) 『台日』一九二三年七月一八日。

- (64) 『台日』一九二三年八月三一日。

- (65) 『台日』一九二三年二月四日。

- (66) 『台日』一九二六年三月八日。

- (67) 『台日』一九三九年一〇月六日。

- (68) 江武昌氏投稿記事より引用。 <https://www.facebook.com/cwc54301/posts/675132905848744> (二〇一六年九月一九日閲覧)。

- (69) 『台日』一九二九年二月一四日。

- (70) 『台日』一九四三年五月九日。

- (71) 『台日』一九四三年二月五日。

- (72) 『台日』一九三四年二月一六日漢文版。